

第 34 期第 3 回研究会「岩波書店百年にみる出版メディア史」（メディア史研究部会企画）終わる

日 時：2014 年 3 月 7 日（金）18:00～21:00

会 場：共立女子大学 本館 B101 講義室

問題提起者：十重田裕一（早稲田大学）

吉田則昭（立教大学）

討 論 者：紅野謙介（日本大学）

佐藤卓己（京都大学）

苅部 直（東京大学）

司 会：大島十二愛（共立女子大学）

参 加 者：69 名

記録執筆者：吉田則昭

今回の研究会では、2013 年に出版社・岩波書店の百周年を機に刊行された、紅野謙介『物語 岩波書店百年史 1 「教養」の誕生』、佐藤卓己『物語 岩波書店百年史 2 「教育」の時代』、苅部直『物語 岩波書店百年史 3 「戦後」から離れて』（岩波書店）、および十重田裕一『岩波茂雄 低く暮らし、高く想ふ』（ミネルヴァ書房）の著者の方々に、登壇頂き、本研究部会としても、出版メディア史の問題として取り組んだ。

問題提起者らは、①岩波書店の知的営為は、これまでの通史、通説にどのような意味を与えることになるのか、②文学、歴史学、思想史研究と出版社の関係・役割はどのような再考を促すのか、③大正期以降の大衆化の流れの中での「岩波文化」の展開過程、戦後への推移といった点からこの出版社が果たしてきた役割、について問題意識を共有し、その上で、第一問題提起者の十重田氏は、大正期から昭和戦前期にかけての文学出版史の視座から岩波書店の創業から岩波新書の創刊までの軌跡を報告、また第二問題提起者の吉田は、1940 年代から 90 年代までの岩波書店の歴史の中から、戦前・戦後の連続性、中間文化、教育と出版、「1968 年」の意味、「戦後」精神史、冷戦後「相対化」の時代、などから問題提起を行った。

問題提起の後、討論者らから、それぞれの論点についてコメントがあった。紅野氏は、同時代における現代性/現代文学という問題を見据えて議論する必要性を、佐藤氏は、「岩波文化」は中高等教育を担った側面があること、戦時下の読書は禁欲的な読書であり、いわば「岩波文化」がそれを象徴する日本の読書スタイルモデルでもあったこと、また苅部氏は、岩波書店が他の出版業のモデルとなった意義は決して小さくはなく、岩波書店ないし「岩波文化」の担ってきた出版史における意義は確認されたが、一方で他の出版社との関係性についてや比較史の視点は十分ではないので、こうした比較出版史の視座は今後の出版メディア史研究の枠組みにおいて必要となってくること、などを述べた。

その後、フロアから質疑応答を含めた自由討論となり、活発な議論がなされた。岩波書店の書籍（文庫、新書、全集）、雑誌のメディア特性から、教養財・文化財（＝生産財）として、また遅効性のメディアとして、その出版活動を捉える必要性が概ね確認された。2014 年には、同社百年史の社史も刊行されることから、学術出版の「教養」への効果、読者への効用を検証できるデータが積極的に公開され、今後のメディア史研究に資するものとなることを期待して本研究会を終了した。